

黒いボディがさっそうと駆け抜ける姿に誰しも一度は目を止める。車いす用電動三輪バイクを愛用する石川次男さん(58)は、車いすを使うようになって34年になる。

1977年、23歳のときに交通事故で下半身の自由を失った。友人が運転する車に乗車していたところ、スピード超過によりカーブを曲がり切れず、車内から放り出され、その衝撃でエビのように骨が背中に飛び出したという。意識不明の重体で10日間、生死をさまよった。へそから下の感覚がないことに気付いたのは、事故発生から一カ月後だった。

手術を繰り返し、3年後に退院。真っ先に向かったのは、免許センターだった。車が好きな次男さんは「足がなくても運転できたはず」と、身障者用の免許に書き換えをした。周囲から「車でけがしたのにまた乗るのか」と言われたが、「生きているのは、車があるからだ」と押し切った。

1989年、車いすテニスの存在を知った。当時、県内に競技者はなく、日本車いすテニス協会から講師を招いて講習を受けた。コート、道具は硬式テニスと同じ。2バウンドでの返球が認められる以外、ルールは変わらない。初めは「本当にできるようになるだろうか」と半信半疑だったが、あつという間に上達した。練習は週2回。大好きな車に乗って、全国各地の大会に参加した。一関運動公園に身障者用のトイレやスロープを整備してもらい、古里で車いすテニス大会を開催するようになって今年で20年になった。

最近、体力の衰えによって、車の乗り降りが大変になってきた。腕だけで

やりたいことがあれば人生楽しめる
 挑戦し続ける気持ちを忘れないで



自ら障がいがありながらも身障者の自立支援をサポートする

石川次男さん

Ishikawa Tsugio 58 萩荘字要害

は支え切れず、車と車いすの間に落ちることもある。そんな中、昨年12月に新しい相棒を手に入れた。車いす用電動三輪バイクだ。リチウムイオンバッテリーをエネルギー源とするEV車で、車いすのまま乗車できる新感覚ビークルの納車に胸が高鳴った。「まともに風を浴びたのはいつぶりだろう。どこまでも行けるような気がした」と冬の冷たい風も心地よかった。

今年、ロンドンパラリンピックが

行われ、多くの選手が活躍した。目標を見つけた人は、障がいの有無にかかわらず、たくましい。

「できないと決め付けないで、一度は挑戦してほしい。おもしろかったら続けて、合わなければ辞める。それでいいんじゃないかな。やりたいことを見つけて人生を楽しんでほしい」

ピアカウンセラー(※)として働く次男さんは、同じ立場の人の自立の可能性を広げるため、サポートを続ける。

Profile 1953年生まれ。1977年に下半身の自由を失うも、常にやりたいことを探してきた。「みちのくふれあいカップ in 一関車いすテニス大会」実行委員長。車いすテニスクラブチーム「WTC15S」所属。社会福祉法人一関市社会福祉協議会一関障害者生活支援プラザでピアカウンセラーを務める。萩荘字要害在住。58歳

(株)ワイディーエスの車いす用電動三輪バイク「WCV」(ホイールチェアビークル)。WCVは、車いすのまま乗車できる新感覚ビークルの総称。ハンドル下にあるバッテリーを家庭用電源で充電して走行。走行速度30キロ、バック可。手動でスロープが上下してロックできる



岩ノ下駅

Iwanoshita_sta.

「地域の思いが形になった駅」

残暑厳しい9月上旬、JR大船渡線「岩ノ下駅」を訪ねた。東山町内にある4駅のうち最も一関に近い同駅は、陸中松川駅と陸中門崎駅のちょうど中間にある。

今回の案内人は石川勝雄さん(83)。同駅待合室の塗装を手掛けた左官技能士だ。「地元の駅を造る仕事に携われて光栄だ。誇りに思っている」と勝雄さん。同駅が開業された当時の様子を次のように振り返る。

「岩ノ下駅は請願駅。当時の村議や有権者を中心に地域を挙げて運動した。しかし、簡単には実現できず、次第に焦りが出てきた。そんな矢先、同じ請願駅の柴宿駅が開業。この吉報が不安を払拭し、地域住民を奮い立た

せた」
 岩ノ下に駅を——。要望活動は加速。こうして地域の願いは現実となった。

昭和41年12月1日、大船渡線「岩ノ下駅」が開業。雪の中で行われた開通式には約200人が集まって開通を祝った。

「朝は列車を待つ人でホームがいっぱいだった。駐輪場には自転車が入りきれなかった」と当時を振り返る勝雄さん。さらに「岩ノ下駅は地域の願いが形になった住民活動のシンボル。住民の生活の足として、これからもずっと守りたい」と胸を張る。

岩ノ下駅を出ると、上り列車は陸中門崎駅を目指す。



④ 岩ノ下駅前の風景。市が新設した公衆トイレは、8月1日から供用を開始
 ⑤ ホームの下は開業当初から駐輪場として利用されている



⑥ 岩ノ下駅を出た上り列車は大きく弧を描きながら陸中門崎駅へと向かう
 ⑦ ホームに彩りを添えるブランターの手入れは、地元老人クラブが交代で行っている
 ⑧ 車窓から望む田園風景。稲刈りが始まった

案内人

石川勝雄さん
 元左官技能士 東山町松川字岩ノ下



Ishikawa Katsuo

天井の塗装が大変でした。1時間おきに通る貨物列車の振動で作業が全然進みませんでした。駅と待合室はいつまでもそのまま残ってほしいです。